

遠くで鳴る雷

小川未明

青空文庫

二じろう郎はは、前まえの圃はたけにまいた、いろいろの野菜やさいの種子たねが、雨あめの降ふつ
 た後あとで、かわいらしい芽めを黒土くろつちの面おもてに出だしたのを見みました。
 小ちいさなちようの羽はねのように、二つ、葉はをそろえて芽めを出だしはじ
 めたのは、きゆうりであります。

そのほかにもかぼちや、とうもろこしの芽めなどが生はえてきまし
 た。

きゆうりは、だんだんと細ほそい糸いとのようなつるを出だしました。お
 母かあさんは、きゆうりの植うわつているところに、たなを造つくつてやり
 ました。たなといつても、垣根かきねのようなものであります。それに、
 きゆうりのつるはからみついて、のびてゆくのであります。

やがて、ほかのいろいろな野菜の芽も大きくなりましたが、いつしかきゅうりのつるは、その垣根にいつぱいにはいまわつて、青々とした、厚みのある、そして、白いとげのようなうぶ毛をもった葉がしげりあつたのでありました。

そのうちに、黄色の、小さな花が咲きました。その後には、青い青い、細長い実がなつたのであります。

二郎は、毎年、夏になると、こうしてきゅうりのなるのを見るのでありますが、その初なるの時分には、どんなにそれを見るのが楽しかつたでしょう。

「もう、あんなに大きくなつた。」と、彼は、毎日のように、家の前の圃に出ては、きゅうりの葉蔭をのぞいて、一日ましに大

きくなつてゆく、青い実を見ては、よろこんでいたのであります。いくつもきゆうりの実はなりましたが、その中に、いちばん先になつたのが、いちばん大きくみごとにできました。

「お母さん、きゆうりがあんなに大きくなりましたよ。」と、二郎は、外から家の内に入ると、毎日のように母親に告げました。

「ほんとうに、いいきゆうりがなつたね。」と、お母さんはいわれました。

二郎は、そのきゆうりがよくてよくて、しようがありません。毎日それに、さわってみては、もいでもいい時分ではないかと思つていました。

ある日ひのことでありました。お母かあさんは、二郎じろうに向むかつて、

「二郎じろうや、あの大きおおくなつたきゆうりをもいでおいでなさい。つるをいためないように、ここにはさみがあるから、上手じょうずにもいでおいで。」といわれました。

二郎じろうは、さつそく圃はたけへと勇いさんでゆきました。そして、はさみを握にぎつて、葉蔭はかげをのぞきますと、そこに大きおおなきゆうりがぶらさがつています。

二郎じろうは、なんとなくそれをもぐのがしのびないような、哀あわれなような、惜おしいような氣きがしてしばらくそこに立たっていました。

二郎じろうは、ぼんやりとして、夢ゆめのように、きゆうりが芽めを出だしたばかりの姿すがたや、やっと竹たけにからみついて、黄色きいろな花はなを咲さかせた時じ

ぶんおも 分を思い出すと、ほんとうにこの実をつるから切り離すのがかわいそうでならなかったのです。

じろう 二郎は、チヨキンときゆうりをもぎました。そして、それを鼻にあてて匂いをかいたり、もつと自分の目に近づけて、このいきいきとした、とりたての、新しい青い実をながめたのであります。「お母さん、これをどうして食べるの？」と、二郎はたずねました。

「まあ、みごとな、いい初なりですね。これは食べるものではありません。おまえが、釣りにいったり、泳ぎにいったりするから、水神さまにあげるのです。」と、お母さんはいわれました。

じろう 二郎は、それを聞くと、なんだか惜しいような気のうちにも、

ひとつのさびしきを感じたのであります。

「水神さまは、きゆうりをたべなさるの？」

「きゆうりは、ぶかぶかと流れて、遠い遠い海の方へいつてしまうのですよ。それでもおまえの志だけは、水神さまに通るのです……。」と、お母さんは哀れっぽい声でいわれました。

二郎は、自分の名をそのきゆうりに書きました。きゆうりの青いつやつやとした肌は、二郎の書こうとする筆の先の墨をはじきました。それでも、二郎は、何度となく筆で、その上をこすつて字を書きました。

「お母さん、よく書けません、これでいいですか。」と、二郎は、きゆうりを母親に示しました。

「おお、いいとも、いいとも。それをおまえは持つていつて投げ
ておいで。」と、お母かあさんはいわれました。

二郎じろうは、きゆうりを持つて、いつも自分じぶんたちのよく遊あそびにゆく
河かわの橋はしのところへやつてきました。ちようど雨上あめあがりで、水みずがな
みなみと岸きしにまであふれそうにたくさんでありました。そして悠ゆ
々うゆうと流ながれていました。

両岸りようがんには草くさや雑木ぞうきがしげっていました。

二郎じろうは、ドンブリと橋はしの上うえから、手てに持つていたきゆうりを水みず
の上うえに落おとしました。きゆうりは、浮うきつ、沈しずみつ、二郎じろうが欄らんか
干んにつかまつて見てみている間あいだに、下しもの方ほうへと流ながれていつてしま
いました。

二郎は、この日、家に帰つても、きゆうりのことを思い出して、さびしそうにしていました。

「いまごろは、どこへいったらう？」

二郎は、あてなく、きゆうりの行方を思っていたのです。すると晩方の空が晴れて、かなたには夏の赤銅色の雲がもくもくと、頭をそろえていました。そして、遠くの方で、雷の音がしたのであります。

二郎は、寝るときもきゆうりのことを思っていました。しかし、床に入るとじきに寝入ってしまった。

その間、きゆうりは、水に、流れ、流れて、夜の間に、森のかけや、広い野原や、またいくつかの村を通り過ぎて、夜の明けたこ

ろにはもはや幾里いくりとなく遠くとおへいつてしまったのです。そして、まだ、そのうえにも、きゆうりは、旅たびをつづけていました。

その日の午後ひごごでありました。一人ひとりのみすぼらしいふうをした乞食こじきの子が、低い橋ひくはしの上に立たつて、独りひとさびしそうに、流ながれてゆく水みずの上を見みていました。水みずには、雲くもの影かげと草くさの葉はの影かげが映うつつていたばかりです。

そのとき、一つのきゆうりが、ぶか、ぶかと流ながれてきました。子供こどもは、棒ぼうを持もつてきて、あわててそのきゆうりを拾ひろい上げました。きゆうりに書かかれた文字もじは、すつかり水みずに洗あらわれて消きえていました。

けれど、遠とおい、遠とおい、水みな上かみから流ながれてきたことだけは、乞食こじき

の子にもわかりました。なぜなら、まだ、このあたりは、風が寒くて、きゆうりの芽がそんなに大きくはならないからです。

乞食の子は、そのきゆうりを手にとつて、大喜びでした。

さつそく、これから母や妹に見せようとあちらに駆け出してゆきました。

この日、はじめて、山のあちらに、雷の鳴るのを子供はきいたのであります。子供はふと途の上に立ち止まって、耳を傾けていました。北の方にも、夏がやってきたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「遠《とお》くで鳴《な》る雷《かみなり》」
となっております。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

遠くで鳴る雷

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>